

祖堂集卷第八 石頭下卷第五曹溪第六代法孫

雲居和尚、洞山に嗣ぐ、洪州に在り。師諱は道膺、姓は王、幽州薊門玉田の人なり。師は齟齬に居り、巖窟として生まれながら知る。竹馬の朋に狎るるに匪ず、卓として乗羊の譽有り。年二十五にして幽州の延壽寺に於いて受戒す。初め毘尼を習う。喟然として歎じて曰く、大丈夫兒、焉んぞ小道に局りて而も大方に晦からんや、と。遂に納衣杖錫し、倅りて翠微を訪えり。一たび玄津に沐するや、三たび星律を移せり。因みに石室に宴止せるに、俄かに二使の積と素と裳を異にするを見るに曰く、師其れ南訪すれば必ず奇人に遇わん、と。果たして義侶有り、洪湖よりして至り、洞山大師は当世の宗匠なりと挙せり。師乃ち衣を擗つて洞山に造る。

洞山大師は格高く調べ古にして、言は簡に旨は玄し。師一たび至りて其の儀敬を畢るや、洞山問う、闍梨、名は何ぞ。師、名は專甲なりと称す。洞山云く、向上に更に道え。師云く、向上に道わば則ち專甲と名づけず。洞山云く、吾れ雲岳に在りし時の祇對の如くして異なること無し。遂に則ち朝詢夕惕し、志しを勵し氷を懐く。赤水以て珠を求むるに効い、温生の目撃を踵ぐ。

因有つて一日、洞山に問う、如何なるか是れ祖師意。洞山云、闍梨、他後一方に住する時、忽し人有つて問わば、作摩生か他に向かつて道わん。師云く、專甲罪過。

洞山又た師に問う、我聞く、思大和尚は倭の国に向かつて王と作る、と。虚なりや実なりや。師云く、若し是れ思大ならば、仏も亦た作らず。豈に況んや国王をや。洞山嘿然として之を許せり。是れより密に玄旨を領し、未だ聞かざる所を聞き、更に他遊せず、学心併息せり。

初め三峯に住し、後ち雲居に住す。鐘陵大王、徳の高重なるを仰ぎ、慇懃なること常に異なる。紫衣と師号とを奏することを為す。師は再三堅く止どむ。是れに由りて法軒大いに敝き、玄教高く敷く。十五余年、春秋、千有余衆を減せず。

師、上堂する毎に云く、それ出家人は、但だ自己分上に抛りて決扱せよ。切に分外なることを得ず。者裏に到りて合はた作摩生か行李せん。身上に什摩の衣服をか被せん。什摩の飯食をか喫せん。合た作摩の声音をか作なさん。身に高上の衣を被せば、須らく高事の道を取るべし。介は千郷万里行脚し来たりて、今の什摩事の為にするや。更に這裏に向かつて容易に過さば則ち知り得ず。小小の因縁の為に大事を妨ぐることを莫れ。大事未だ弁ぜざれば、日夜故より合に因修すべし。所以に道う、尊嚴に対するが如く長に須らく競底なることを得べし。決扱するの次いで軽水を履むが如くせよ。勤めて至道を求むること頭然を救うが如くせよ。更に什摩の余暇か有らん。火の身に逼るが如く便ち須らく去離すべし。一切事来たらば、惣に須らく這裏に向かつて盪羅取せよ。頭頭に須らく及ぶべく、物物上に須らく通ずべし。若し毫髪の事の及原作乃び尽さざる有らば則ち沈累せらるるを被らん。豈に況んや多道に於いておや。你一步も纔かに失するや、便ち須らく一步を却廻すべし。若し廻らざれば、冥然たること累劫ならん。便ち是れ生を隔つ。千生万生を隔却するは、事祇だ一向なるが為なり。若し這裏に向かつて得ざれば、万劫千生著鈍せん。

・ 不得分外 分外であつてはいけない。はみ出てはいけない。

・ 盪羅取 点検せよ。

・ 事祇為一向 これこれというのはただ一向だからだ。

・ 若向這裏不得 この点でもものにならなければ。

・ 著鈍 ボサツとしていること。俗語。

問う、如何なるか是れ囊劫の事。師云く、祇だ如今に在り。僧曰く、如今は作摩生そまさん。師云く、囊劫の事有るを見ず。

師上堂し、繩床辺に在りて立つ。大衆も亦た一畔に在りて立つ。良久して便ち歸り去る。

・ 一畔 かたわらに。

俗士、僧に問う、某甲の家中に一個の鑑子有り、尋常、飯を煮る。三人喫すれば足らず、千人食すれば余り有り。上座作摩生。僧無對。師代わつて曰く、争えば則ち足らず、讓れば則ち余り有り。

・鑑子 足のついたなべ。

尚書有りて問う、古人に言うこと有り、世尊に密語有り、迦葉は覆藏せず、と。如何なるか是れ世尊に密語有り。師は尚書を喚べり。尚書応諾す。師云く、還はた会するや。尚書云く、会せず。師曰く、汝若し会せざれば、世尊に密語有り。汝若し会せば、迦葉は覆藏せず。

師、僧に問う、汝の名は何摩ぞ。對えて云く、行密なり。師云く、是れ何摩行にしてか与摩に密なることを得たる。僧無對。師代わつて云く、此くの如しと雖いふ則も、人の未だ專甲を許さざる有り。

・は何摩行得与摩密 なんの行がそんなに密なることを得たか。

・有人未許專甲在 在は句末の強辭。

師、衆に示して云く、人の一百貫の錢を將て獬狗を買ひ得たるが如き、只だ解よく蹤跡有る底を尋ね得るも、忽ち靈羊の角を掛くるに遇わば、蹤跡は道う莫れ、氣も也た識らず。僧便ち問う、靈羊の角を掛くる時如何ん。師云く、六六三十六。又た云く、会するや。對えて云く、会せず。師云く、道うを見ずや、蹤跡無し、と。

僧は趙州に拳似せり。趙州云く、雲居和尚は猶お在り。僧便ち趙州に問う、靈羊の角を掛くる時如何ん。州云く、六六三十六。
・只解尋得有蹤跡底 少くとも跡をつけることはうまい。

・ 莫道云々 蹤跡どころか臭いさえも嗅ぎ分けない。莫道は、……は言わずもがな。

・ 靈羊掛角 靈は羚の当て字。羚羊は夜ねむるとき角を木の枝に掛け、脚を地から離して痕跡を絶つという。第一義諦における接化の仕方に喩える。

・ 六六三十六 互いに諒解すみの真実。

問う、大肯底の人と大捨底の人とは是れ一なるか、是れ二なるか。師云く、是れ二なり。僧曰く、阿那个か是れ軽く、阿那个か是れ重き。師云く、太肯是れ重く、大捨是れ軽し。僧曰く、大肯底の人は什摩と為てか重き。師云く、此の人は自己向上の事は不淨物に似たりと見る。所以に功勲辺に落ちず。大捨底の人は則ち有身は則ち是なりと見ず。所以に向去の功勲辺の事に属す。豈に是れ輕からずや。

・ 功勲辺 価値の次元。

・ 向去 将来。

問うて曰く、達摩未だ来たらざる時、什摩^{いすこ}処に在りや。師答えて曰く、只だ這裏に在り。進んで曰く、什摩と為てか見ざる。師曰く、西天に過ぎ去れり。

問うて曰く、耳に於いて聞かず、眼に於いて声を聞く時は如何ん。師曰く、眼邊^はた聞かや。對えて曰く、聞く者は是れ眼ならず。師自ら代わつて曰く、眼の聞くは眼には非ず。

・ 眼聞非眼 眼が聞くのが眼なのではない。

問う、三衣を被するは即ち這辺の人なり。那辺の人の事は作摩生。師云く、那辺の人は什摩の衣服を被するや。学人会せず。師云く、闕かず。学人云く、闕かざる底の事作摩生。師云く、生生揀はず。

僧有り問う、惣べて人無き時、和尚は還た説話するや。師曰く、未だ曾つて此の時を停めず。進んで曰く、什摩人の聞くを得るや。師曰く、説かざる者の聞くことを得。進んで曰く、師は還た聞かや。師云く、聞かば即ち説かず。

・未曾停此時 現在の状態が停止することはない。

問う、遊子の家に帰る時如何ん。師云く、且らく帰り来るを得たるを喜ぶ。進んで曰く、何を將て奉獻するや。師云く、朝打三千、暮打八百。

・且喜得归来 帰つて来てよかつたな。

・将何奉獻 遊子が。

・朝打三千暮打八百 太鼓のばちや罰棒などで限りなく打ちたたくこと。

人有りて問う、如何なるか是れ清浄迦藍。師曰く、合た什摩人を著くや。僧無対。自ら代るらく、是れ著かざるならずも、渠は円位に坐せず。

人有りて問う、大業底の人、什摩と為てか闍羅天子は覓め得ざる。師云く、是れ伊は解く身を蔵せばなり。進んで曰く、忽然として投著する時作摩生。喫拳喫趨す。

・覓不得 探しても見つけようがない。

・解蔵身　かくれ身が上手なんだ。

・忽然投著時作摩生　そいつがエンマのところへ駆け込んで来たらどうするか。投著の投は投宿の投、著は接尾語わらじを脱ぐ。

師、衆に示して云く、孤迴にして且つ巍巍たり。僧云く、便ち請う。師云く、孤迴にして且つ巍巍たり。学人会せず。師云く、是れ徐、面前の桜山、豈に会せざるや。

・便請　どうぞ続けてください。

・面前桜山　雪峯悦話要「前は案山、後は主山」。桜山は主山の手前に低く控える山。山水の構図。

師、僧に問う、什摩处にか去き来たる。对えて曰く、山下に去き来たれり。師云く、草は還た青きや。对えて曰く、青し。師云く、牛は還た喫せるや。僧無对。自ら代わつて云く、余り有り、余り有り。駄？云く、希望せず。又た云く、自ら足らば即ち是なり。

・有余有余　もう十分。

・不希望　喰べたいと思わない。

人有りて問う、二祖、臂を截つ、当た何事を為すや。師云く、少少の苦を為さず。進んで曰く、求めて還た得たるや。師云く、此の身当に射すべし。

師、順世に臨みし時、師、侍者に問う、今日は是れ幾ぞ。侍者云く、三日なり。師云く、三十年も也た只だ這个是れ。

・是幾　何日だ。

・只這个是　ただこれだけだ。

人有りて問う、戸を出でざる者如何ん。師云く、事に著せず。進んで云く、什麼と為てか事に著せざる。師云く、戸を出でずして事に著せず。又た云く、此は是れ理用なり。

・ 不出戸 老子四七章「不出戸知天下」。

・ 不著事 事にかかわらない。

問う、逢わざる時如何ん。師云く、也た大いに屈す。僧云く、遇うを得て逢うを得る時如何ん。師云く、也た大いに屈す。進んで曰く、既に遇うを得て逢うを得たるに、什麼と為てか却つて屈を成すや。師云く、千劫も過ぎ来たらず。僧曰く、与摩ならば則ち逢わず遇わざる即ち是なり。師云く、路上に行人絶ゆ。

保福拈じて困山に問う、古人道う、逢うを得て遇うを得るも亦た是れ屈す、逢わず遇わざるも亦た是れ屈す、と。逢わず遇わざる時屈するは則ち且らくまか従す。逢うを得て遇うを得、什麼と為てか却つて是れ屈する。困山云く、上座行脚底の事作摩生。保福肯わずして自ら云く、従来合に作摩生なるべかりしや。又た前に代わつて云く、且らく行脚し去れ。

・ 屈 自分に非はなくて巻き添えを喰う場合にも言う。

・ 千劫不過来 千劫たつても相手はやって来ない。

・ 与摩則不逢不遇即是也 そうだつたら出会わん方がいいや。

・ 路上行人絶 歩く人のない路。

・ 上座行脚底事作摩生 会う会わんより、上座の路の行き方はどうなんですか。足の運び方はどうなんですか。貴方の行脚のし方次第でしよう。

・ 合作摩生 どうあるべきだったか。どう行脚したら屈にならずに済んだか。

問う、文殊は劔に仗(原文丈)りて何人を殺さんと擬(まね)するや。師云く、動く者先ず死す。僧曰く、万里無寸草の処作摩生。師云く、誰人か殺を受けん。僧曰く、生死を弁ぜざる底の人作摩生。師曰く、人に由らず。

- ・ 不弁生死底人作摩生 生死をまったく知らない人、殺されても死んだと思わない人には、どういつ劔の使い方をするか。
- ・ 不由人 文殊の劔は人がどうこういうことではない。後世では、仲仲思い通りにならないという意味だが、今は別義。

問う、古人道う、仏は道を会せず、我自ら修行せん、と。如何なるか是れ仏は道を会せず。師云く、仏と衆生と惣べて会せず。進んで曰く、是れ什摩人が会する。師云く、是れ閻梨会す。僧云く、和尚道え、閻梨は是れ什摩人なるぞ。師云く、仏に非ず衆生ならざる者。

・ 古人 南泉普願語 伝灯録二十八。

・ 是閻梨会 ほかでもないお前さんが会するんだ。

問う、純石の山、草は何よりか生ずる。師云く、理めざれば則ち乱れず。僧云く、忽然として片雲来たる時如何ん。師云く、視ること莫し。僧云く、与摩ならば則ち空然たり。師云く、何ぞ必ずしもせん。

・ 空然 無記空。

・ 何必 そつとも言えないだろう。そつとも限らんだろう。

同安問う、重玄不到の処如何ん。師云く、向上の事作摩生。安云く、則ち重玄に非ず。師云く、得ず。同安肯わず。在後收過し、前

語を改めて云く、誰か到不到を言つ。

・ 向上事作摩生 もつ一つ次元を下げて問うたらどつだ。

・ 不得 だめだ。

・ 收過 あやまちを詫びる。

・ 誰言到不到 そもそも到不到を言つのは誰なのか。

撫州刺史便ち円長老に問う、只だ国王大臣の如きんば未だ曾つて小福有るを見ず。未審^{いぶか}し、曾つて什摩人に供養し来たれるや。長老云く、曾つて仏に供養せり。刺史云く、仏有らば則ち供養せんも、未だ仏有らざる時は什摩人に供養せん。長老無對。師代わつて云く、賢者は隠れず。報慈代わつて云く、未だ仏有らざる時、何ぞ吾に問わざる。

問う、目を挙げて意を知る時如何ん。師云く、什摩生事。

・ 什摩生事 什摩生が形容詞になることはない。

問う、宝珠を採らんと欲する時如何ん。師云く、羅刹鬼国に漂入す。僧曰く、大慳惜生。師云く、自ら是れ你に分無し。

・ 採宝珠 河などに入つて。

・ 漂入羅刹鬼国 流されてしまつぞ。

・ 大慳惜生 大したけちんぼだな。

・ 你無分 珠など手に入れる柄じゃない。

因みに兵馬の雲居山に入り、衆僧捻へて走る。唯だ師の端然不動なる有るのみ。統軍使礼拝せずして対坐して便ち問う、世界は什摩の時か安きことを得ん。師云く、將軍の心の足を待つ。統軍便ち礼拝して師と為せり。

・待將軍心足 機をとらえた答え。

問う、松生して三寸なる時如何ん。師云く、他より得ず。僧云く、直に雲霄を抜く時如何ん。師云く、是れ本来身ならず。進んで云く、還た四時を偸るや。師云く、諸有に涉らず。

・不從他得 他は三寸の松を指す。

・直 まつすぐに。

・還偸四時也無 時節因縁を条件とするんでしょうか。

・不涉諸有 その様な条件づきの有とは関係ない。

問う、言句を偸らずして、還た本源に達するや。師云く、与摩の人に問取せよ。僧対えて云く、只今現に問う。師云く、更に一問せんことを討む。

・不偸言句 言句なしでも。

・問取与摩人 そういつ人に訊いて見る。

・只今現問 いま与摩の人に問っているんです。だから与摩の人としての答えがほしい。

・更討一問 もう一問ほしい。筋の通った問を出しなせ。

僧有りて問う、三千里外より久しく雲居を嚮う。三千里内の事は如何ん。師云く、三千里内は尽く是れ真如なり。進んで曰く、如

何なるか是れ真如。師云く、三千、三千。

問う、雪山六年の苦行は当た何事を為すや。師云く、自ら其の志を立てて、万法に依らず。僧曰く、明星の出づる時、当た何の見
る所ぞ。師云く、都べて見る所無し。僧曰く、作何に功課すれば則ち外道の帰心することを得るや。師云く、一切俱に息む。進んで
曰く、弊垢衣を著くる、彼中の消息は如何ん。師云く、転た高くし去る。僧曰く、与摩ならば則ち化を現じて機を勧むるなり。師云
く、將つて有と為さず。

問う、古人道う、我が這裏に刮骨の禪有りて身も也た無し、と。如何んが刮せん。師云く、直に須らく刮すべし。僧曰く、髓も
也た無し、如何んが刮せん。師云く、始めて刮するを得たり。僧曰く、刮せし後如何ん。師云く、則ち骨髓に非ず。

・古人 洞山

・始得刮 刮りが完成した。

仏曰問う、二竜の珠を争う、誰か是れ得る者ぞ。師云く、業身を捨却し来たれ。仏曰云く、業身已に捨せり。雲居便ち云く、珠は
什摩処にか在る。仏曰無對。仏曰別時に前に依りて挙す、某甲比来、和尚に問う、業身已に捨せり、珠は什摩処にか在る、と。与摩
に排批して、和尚便ち奪い、某甲道い得ざりき。忽ち人有つて問わん、業身已に捨せり、珠は什摩処にか在る、と。和尚作摩生か道
わん。師云く、頭を転ずれば則ち得ず。又云く、更に唌路有り作摩生。仏曰無對。師云く、誰か珠を求むる者ぞ。

・唌路 不詳。

師、衆に示して云く、十度発言せんと擬して、九度却つて休し去る。什摩と為てか却つて此くの如くなる。只だ你諸人に利益無か

らんことを恐るればなり。長慶、挙するを聞きて別に云く、十度発言せんと擬して、十度却つて休し去る。道う莫れ、諸人に利益無しと。僧、長慶に問う、古人道う、十度発言せんと擬して、九度却つて休し去る、と。古人は何摩と為てか却つて此くの如くなる。慶便ち之を掴す。又た云く、このは是れ布袋和尚の真なり。又た云く、更に一路有り、汝自ら看よ。

・ 莫道諸人無利益 諸人に利益がないどころの話ではない。

問う、牛頭未だ四祖に見えざる時如何ん。師云く、在り。僧云く、見えし後如何ん。師云く、忘却せり。

・ 在 そこにある、ちゃんとある。

問う、相い逢つて相い識らんと欲するも、脉脉として言つ能わざる時如何ん。師云く、適来泊ほとんど道い得たり。

・ 相逢云々 民謡風な詩句。

・ 脉脉 エモーショナルな感じ。心いっぱい、言葉にならない。

・ 適来泊道得 それでほとんど言えてるじゃないか。

自余の玄要は此に尽くは彰わさず。

天復元年辛酉の歳の秋、忽ち微疾有り。十二月上旬に至りて累りに教令有り。二十八日夜に至り、主事及び三堂の上座参省す。師顧視して云く、汝等は此に在りて、粗ぼ遠近を知れり。生死は尋常なれば、以て憂慮すること勿れ。斬釘截鉄して、仏法に違ふこと莫れ。出生入死、如来に負くこと莫れ。事宜には多無し、人各おの了取せよ。

二年壬戌の歳正月二日に至りて、侍者に問う、今日は是れ幾ぞ。云く、新年巳に二なり。師曰く、吾れ出世し来たりて恰も三十年、亦た行く可し。三日寅の時終せり。

・事宜無多 然たるべきことは幾通りもの方法があるのではない。今なすべきことは一つしかないはずだ。

欽山和尚、洞山に嗣ぐ。師諱は文遂、未だ行状を覩ざれば、氏族を窮むる莫し。武陵の雷相公、礼するに接足を以てし、終始に替かはず。

僧問つ、如何なるか是れ祖師西来意。師云く、梁公の曲尺、志公の剪刀。

・梁公曲尺 梁の武帝のものさし。

・志公剪刀 宝志の截ちばさみ。

問う、一切諸仏及び諸法は皆な此の經より出づ。如何なるか是れ此の經。師曰く、常に転ず。僧問つ、未審し經中に什摩を説くや。

師曰く、疑い有らば請問せよ。

・一切諸仏云々 金剛經の句。

師、臥竜、雪峯と茶を煎る次いで、明月の坑水に徹るを見る。師曰く、水清ければ則ち月現わる。臥竜曰く、水清ければ則ち月の現われざる無し。雪峯便ち坑水を放却し了って云く、水月は什摩処にか在る。

因みに將江寺の僧、錢を乞う。人有りて問う、錢を乞うて什摩をか作すな。云く、掘井錢なり。既に是れ將江なるに、井を掘りて什摩をか作す。対無し。師代わって云く、衆流を飲まず。

師、道士に問う、法の為に来たるや、礼拝の為に来たるや。対えて云く、法の為に来たれり。師云く、若し法の為に来たらば坐するを得ず。道士問う、麁言及び細語、皆な第一義に帰す。如何なるか是れ第一義。師云く、汝は是れ仏家の奴なり、是なりや。対えて云く、和尚は太麁生なり。師云く、第一義は何にか在る。進んで云く、和尚は三教に通ずること莫きや。師云く、三教は且らく置（原作致）く、老君は什摩の時に生れたるや。対えて云く、混沌未分の時に生る。師曰く、混沌未分の事作摩生。道士無對。師便ち之を打つ。

・ 汝は仏家奴是不　お前は仏家の奴隷だ、そうではないか。

中山和尚、洞山に嗣ぐ、高安県に在り。師諱は道全、未だ行状を覩ざれば終始を決せず。

師、洞山に問う、如何なるか是れ出離の要。洞山云く、閻梨足下に煙生ず。師便ち悟る。後ち雲居進んで云く、与摩ならば則ち敢えて和尚に辜負せじ。大光進んで云く、与摩ならば則ち敢えて造次にせじ。所以に文家、第一の和尚を讃えて云く、師は撃耳の言を聞き、便ち修證の路を息めたり、と。

・ 足下煙生　足下雲生と似た趣旨の句か。

・ 不敢造次　めったなことはいたしません。細心にやります。

問う、清淨の行者は涅槃に入らず、破戒の比丘は地獄に墮ちず。古人の意旨は如何ん。師云く、度し尽くして遺影無し、他に涅槃を越ゆることを還す。

問う、二竜の珠を争う、誰れか是れ得る者ぞ。師云く、衆類皆な尽き、但だ目前に似るのみ。僧曰く、与摩ならば則ち二竜俱に得

ず。師云く、但だ二竜のみに非ず、千仏も得ず。僧曰く、非仏は還た得るや。師云く、得る者は是れ明珠ならず。

・衆類 竜のたぐい。

曹山和尚、洞山に嗣ぐ、杭州に在りて住す。師諱は本寂、泉州莆田県の人なり。俗姓は黃。少くして九經を習い、志し出家せんことを求む。年十九にして父母方めて聴せり。福唐県の靈石山に受業す。年二十五にして師方めて受戒することを許せり。而して拳措威儀、皆な舊習の如くす。便ち方外に雲遊し、初めて洞山の法筵に造れり。

洞山問う、闇梨、名は何摩ぞ。對えて曰く、專甲。洞山云く、向上更に道え。師云く、道わず。洞山曰く、什摩と為てか道わざる。師云く、專甲と名づけざればなり。洞山深く之を器とせり。盤泊するもの数年、密室に旨を承けたり。因みに一日辞し去らんとす。洞山問う、什摩処いすこに去くや。師曰く、変異せざる処いすこに去く。洞山曰く、変異せざる処いすこ、豈に去くこと有りや。師云く、去くも亦た変異せず。

介れよりの後、兀兀として時を延べ、依依として放曠す。其の道の友に非ざれば言を交じうるを得る無し。穩に自由ならずして化縁將に至らんとす。初め曹山に住し、後ち荷玉に居す。鐘陵の大王、徳の高きを嚮仰し、再三使を降して仰請せしむ。師乃ち疾に託して命に従わず。第三の遣使去く時、王曰く、此度若し曹山大師を得来たらざれば、更に相見するを要せず、と。使は旨を奉じて山に到り、泣きて告げて和尚に曰く、大慈大悲もて一切を救度せよ。和尚此度若也もし王旨に赴かざれば、弟子の一門便ち灰粉せらる。師云く、專使、憂慮無きことを保たん。去く時に貧道、一首の古人の偈を附せん。大王に上れば必ず無事なることを保たん。偈に曰く、摧残の枯木の青林に倚る、幾度か春に逢うも心を変えず。樵客の之を見るすら猶お顧す、野人那ぞ更に苦るに追尋せん。使廻りて偈を通ず。王は遙かに山を望み、頂礼して曰く、弟子は今生決定して曹山大師に見るを得ず、と。

・依依 未練がましい状態、放曠とのつながりが可怪しい。

・穩不自由 穩は、ぴたりと腰がすわっている、危気がない。不自由は、外典では勝手気ままをしない意。

・摧残枯木云々 大晦法常の偈(伝灯録七)。

是くの如き二処の法席、咸な二十年、参徒は冬夏、二百三百に盈てり。

師、上堂する毎に示誨して云く、諸人、曹山の説かざるを恠しむこと莫れ。諸方に多く説成底の禪師有り。你諸人の耳裏は惣へて満てり。一切法、接せず借らず、但だ与摩に躰会すれば、他家の差別知解は闇梨を奈何んともする無く、天地は洞然たらん。一切事は麻の如く葦の如く、粉の如く葛の如し。仏出世するも亦た奈何んともせず、祖出世するも亦た奈何んともせず。唯だ躰し尽くせば即ち過患無きこと有るのみ。你、他の千経万論説成底の事を見て、自在を得ず始終を超えざるは、盖し自己の事を明らめざるが為なり。若し自己の事を明めざれば、乃至闇梨も亦た他の諸聖の与に縁と為り、諸聖は闇梨の与に境と為り、境縁相い涉りて了する時有ること無けん。如何んが自由なることを得ん。若し躰会し尽くさざれば則ち他の一切事を転じ去らず。若し躰会して妙を得れば則ち他の一切事を転じて、背後に向かつて、僮僕と為して著かん。是の故に先師云く、躰することは妙処に在り、等閑と將作すこと莫れ、と。這裏に到りて貴賤を分たず、親疎を別せざれば、大家人の守銭奴の如くに相い似て、用いる時に至るに及びて、是れ渠惣じて東西を知るを得ざらん。這裏に便ち是れ縑素を弁ぜず、清濁を識らず。若し是れ下人にして出で来たつて、衣は更に阿郎に勝れるを著くるも、奈何んせん、縁りて人の伊を識得することを被ることを。専甲、諸人に向かつて道つ、向去に語れば則ち浄潔なるも、事上に語れば却つて浄潔ならず、と。且く什摩を喚んで事上の語と作すや。這裏は没量の大人すら弁じ得ず。

・説成 一家の説をなす。

・躰尽 一切事を自己の中に収斂する。

・明自己事 己事究明。

・著衣更勝阿郎奈何云々 主人に勝つた衣を着てもすぐ見ぬかれてしまつ。

・向去語則浄潔 向去は俗語で、先の方、超越的な方向。はるか彼方について語れば純粹。

僧問つ、学人、和尚の此間すかんに到りてより、个の出身の処を覓め得ず、乞う和尚、个の出身の路を指示せよ。師云く、闍梨は曾つて什摩の路をか行き来たれる。云く、這裏に到つては弁じ得ず。師云く、第一に出身の処を覓(原文にはなし)むるを得ず。

・第一不得覓出身処 絶対に出身処を求めてはいけない。

問う、古人道う、苗よりして地を弁じ、語よりして人を識る、と。只今の語や、請う師弁ぜよ。師云く、弁ぜず。僧曰く、什摩と為てか弁ぜざる。師云く、道うを見ずや、曹山は好手なりと。

・好手 やり手。

問う、魯祖面壁し、用て何事をか表す。師は手を以て耳を掩う。

問う、無言にして如何んが現わさん。云く、這裏に向かつて現わすこと莫れ。僧云く、什摩処に向かつてか現わさん。師云く、昨夜三更、三个の錢を失却せり。

・昨夜三更云々 その錢はもう見つかりつこない。

問う、日の未だ出でざる時如何ん。師云く、昔日、曹山も亦た曾つて与摩にし来たれり。進んで云く、日の出でし後は如何ん。師云く、猶お曹山三月の糧を欠く。

問う、古人は面壁して当はた何事を為すや。師云く、両株の嫩柱昌昌たることを欠く。

問う、承るらく教中に言つこと有り、未だ輪廻を出でずして而も円覚を弁ず、彼の円覚の性は則ち輪廻に同じ、と。如何なるか是れ未だ輪廻を出でずして而も円覚を弁ず。師云く、人の途に在りて家事を説くが如し。如何なるか是れ彼の円覚の性は則ち輪廻に同じ。師云く、宛然として途に在りて途程に涉らず。還た弁ずる処有りや。師曰く、若し弁ずる処有らば則ち円ならず。只だ弁ずる処無きが如きは還た流転するや。師曰く、亦た流転すること有り。如何んが流転する。曰く、要且つ团团ならず。

・教中 円覚終。

・弁 見てとる。

・要且 つまるところ。

・团团 円い。

問う、眉と目とは還た相い識るや。師云く、相い識らず。進んで云く、什摩と為てか相い識らざる。師云く、同一一処に在るが為なり。僧云く、与摩ならば則ち分たざるなり。師云く、眉は且らく是れ目ならず。如何なるか是れ目。師云く、端的にし去る。如何なるか是れ眉。師云く、曹山は却つて疑う。僧曰く、和尚は什摩と為てか却つて疑う。師云く、我れ若し疑わざれば則ち端的にし去らん。

・不相識 赤の他人だ。

・眉且不是目 そう簡単にはいかん、眉と目はやっぱり違つ。

・如何是目 目とはどういふものですか。

・端的去 疑つ余地のないそのままの在り方である。目は目であつて他ではない。

・曹山却疑 眉となるとわしには解らん。眉は一刻せあつて一筋なわけはいかん。目のように端的にはし去らん。

・我若不疑則端的去 疑わなければ目と同じように端的に行くかも知れんが、どうもわしにはよく解らん。

問う、常に生死海中に在つて沈没する者は是れ什摩人ぞ。師云く、第二月。僧曰く、還た出離を求むるや。師云く、也たと出離を求むるも、只だ是れ路無し。僧云く、出づる時、什摩人が伊がれを接得する。師云く、鉄枷を担う者。

・也求出離 この也は雖と同じ。〜といえども。

問う、朗月当空の時如何ん。師云く、猶お是れ塔下の漢。僧曰く、請う師、塔上に接せよ。師曰く、月落ちし後に相見せん。

・接 手で受けとる。

問、罕如何仮。師云、不希夷。僧曰、作何佯。師曰、不申晒。僧曰、与摩則零去也。師云、不申晒、零什摩。

・此の一段読解不能。

問う、一牛水を飲み、五馬嘶かざる時如何ん。師云く、曹山は孝満てり。

・孝満 親の喪があけた。

問う、相に於いて何か真なる。師云く、即相即真なり。僧曰く、当た何者を示すや。師便ち境子を提起す。

・当示何者 いったい何を示しているのか。

問う、国内に劔を按ずる者は誰ぞ。師云く、曹山。僧曰く、何人をか殺さんと擬なまする。師曰く、但有ある一切惣べて殺す。云く、忽

ち本生の父母に逢う時は作摩生。師云く、什摩をか^{えら}揀ばん。僧云く、自己を争奈何んせん。師云く、誰か我を奈何んせん。僧云く、什摩と為てか殺さざる。師云く、手を下すの処勿し。

・国内按劔者誰 国内で一番の禅者は誰か。

俗士問う、古人道えり、人人尽く有り、と。弟子は塵濛に在り、還た有りや。師は手を過し来たり、遂に指を點頭して云く、一二三四五、足れり。

・過手来 相手の手を引きよせて。

・點頭指 指を一本一本折って。

問う、古人に言うこと有り、未だ一人の地に倒れて地に因りて起たざる有らず、と。如何なるか是れ地。師云く、一尺二尺。如何なるか是れ倒。云く、肯えば即ち是。如何なるか是れ起。師云く、肯えば即ち是。如何なるか是れ起。師云く、起てり。

・肯即是 倒れた本人が倒れたと思つたら倒だ。

・起也 そらもう起つた。

問う、何の知解を具せば、善く能く衆の問難に對うるや。師云く、言句を呈せず。僧曰く、既に言句を呈せざるに、个の什摩をか問難せん。師云く、刀斧も斫り入らず。僧云く、^よ解く^よ与摩に問難する、還た更に肯わざる者有りや。師云く、有り。僧云く、是れ什摩ぞ。師云く、曹山。

・問難个什摩 いったいどんな問難の仕方ができましようか。

・刀斧斫不入 斫っても刀が入らない。

問う、幻の本は何真なりや。云く、幻の本には真無原作元し。僧曰く、幻に当たりて何か現わる。師云く、即ち幻即ち現わる。僧曰く、与摩ならば即ち始終、幻を離れざるなり。師云く、幻の相を覓むるに不可得なり。

・何真 どういう真か。

・当幻何現 幻として現れるものは何か。

僧問う、什摩の道伴に親近すれば即ち常に未聞を聞かんや。云く、共に一被蓋を同にす。僧云く、此は猶お是れ和尚の聞くを得たる。如何なるか是れ常に未聞を聞く。師云く、木石に同じかる可からず。僧曰く、何者が先に在り、何者が後に在る。師云く、道つを見ずや、常に未聞を聞く、と。

・共同一被蓋 同じ一枚のふとんを共にしているもの同志だ。被蓋は掛けぶとん。

・不可同於木石 自分を木石と同じと思つちやいかん。

・何者 二人の中のどちらが。

問う、古人道う、諸仏諸祖は有ることを知らず、狸奴白牯却つて有ることを知る、と。諸仏諸祖は什摩と為てか有ることを知らざる。師云く、仏は相似を為し、祖は執印を為せばなり。僧云く、狸奴白牯の什摩有ることをか知る。師云く、狸奴白牯有ることを知る。云く、仏祖は什摩と為てか相似し執印するや。師云く、人に此中の妙会を阻碍するもの無し。

・仏為相似 仏はみな似たようなものだからだ。

・人無阻碍此中妙会 そのところを解らなくするものを他人は持っていない。自分で持っている。

問う、教中に言つこと有り、一闍提を殺さば、福を獲ること無量ならん、と。如何なるか是れ闍提。師云く、仏見法見を起す者云く、如何なるか是れ殺。云く、仏見法見を起さざるは殺。師却つて僧に問う、是れ明闍提か、是れ暗闍提か。僧無對。師代わつて云く、白裏肚に皂襖を著く。此の意なる者は、起見は明なるが故に白と云い、不起見は暗なるが故に皂(原作墨)と云う。

・ 師却問僧 前僧の問とまるで別の文脈になっている。

・ 裏肚 腹がけ。

・ 襖 わた入れの袴

・ 此意者 以下後人の割注なるべし。

師、教中の事を挙して大衆に問う、無問而自説、稱讚所行道、作摩生か是れ無問而自説。云く、尽大地に未だ一人の聞くを得るもの有らず。師云く、与摩なりと雖然も、一个の字を摘み、一个の字を添うれば、仏法大に行われん。衆無對。師云く、尽大地に未だ一人の聞かざるもの有らず。

・ 教中 法華經方便品。

・ 尽大地未有一人得聞 そもそも聞くことのできる人間なんて、この世の始まって以来一人もいない。

師垂語して云く、此の座は高広にして吾は昇る能わず。未審し、喚んで什摩座と作さん。強上座對えて云く、喚んで此の座と作すも早是に触汚せり。師云く、還た昇り得る者有りや。對えて云く、有り。師云く、是れ什摩人ぞ。對えて云く、足を挙げざる者。師曰く、昇り得る者は便ち是れ座上の人なること無きや。對えて云く、也た是れ左右。師云く、如何なるか是れ座上の人。對えて云く、此の座に昇らず。師云く、既に昇らず、座を用いて何をか為す。對えて云く、無ければ則ち得ず。師云く、只だ座の如きは為當別に人有りや、為復座を轉じて上身と為すや。對えて云く、即ち座を轉じて上身と為す。師云く、是くの如し、是くの如し。

・也是左右 昇り得た者でもびたりと坐っているわけではない。

・無則不得 座がなければ昇りようがない。

・一則の題をつけるならば、「法の説き方は如何にあるべきか」。

師、僧に問う、什摩処よりか来たる。対えて云く、大光より来たれり。師云く、来たる時、光は還た現わるるや。対えて云く、現われずして常に現わる。師云く、還た照らすや。対えて云く、照らさず。師云く、大光何にか在る。僧無對。師云く、將に謂えり是れ玉璽なりと、元来只だ是れ天南の角なるのみ。師代わつて云く、直に照らさざるを得て始めて大光なることを得。

・將謂……元来……とばかり思っていたら、なんと……だった。思いちがいでいた。

・天南 嶺南。

・直得不照始得大光 不照といふところまで行き得て始めて大光の値打ちがある。直得は俗語で、その究極まで徹底する。

問う、古人道う、得座被衣と。如何なるか是れ得座。師云く、東西を顧みず。如何なるか是れ被衣。師云く、去離し得ず。僧云く、是れ个の什摩衣にしてか去離し得ざる。師云く、人人尽く有する底の衣即ち是れ。僧云く、既に是れ人人尽く有する底ならば、被するを用いて什摩をか作す。師云く、豈に道うを見ずや、起倒相い随い、処処に活くるを得、と。僧云く、向後自ら看る事如何ん。師云く、被衣を認めざれ。又た云く、衣を脱却し来たつて相見せよ。

・得座被衣 伝灯録九瀉山章「此乃得座被衣、自解作活計」。

・不顧東西 方角、位置の制限を受けない。

・去離不得 自分の皮膚はひっぱがし得ない。

・得活 自ら活計をなす。

- ・ 向後自看事如何 これからは自分勝手にやって行って、始末をつけて行っていいんですね、いかがでしょうか。
- ・ 不認被衣 衣という意識が残存してはならない。
- ・ 脱却衣来相見 着ものを脱いで会いに来なさい。

問う、如何なるか是れ十年帰り得ず、来時の路を忘却せり。師云く、楽を得て憂を忘る。僧云く、什摩の路をか忘却せる。師云く、十処即ち是れ。僧曰く、還た本来の路を忘却せるや。師云く、亦た忘却せり。僧云く、什摩と為てか九年と言わずして、十年を要須もといるや。師云く、若し一方の帰らざる有らば、我れは身を現せず。

- ・ 十年帰不得云々 寒山詩。ただ本来の寒山の詩からは離れている。
- ・ 忘却什摩路 忘れた路とはどんな路ですか。
- ・ 十処即是 十方の路。
- ・ 若有一方不帰、我不現身 一方だけでも欠けたら、身を現じたことにならん。私は曹山ではなくなる。

問う、教中に言うこと有り、童子は全身を捨て、夜又は半偈を説けり、と。如何なるか是れ童子は全身を捨て。師云く、端正を失却す。如何なるか是れ夜又は半偈を説く。白雲、荆棘を纏めぐる。如何なるか是れ端正を失却す。師云く、只だ是れ少父を失却せる便ち是れなるのみ。

- ・ 荆棘 非情世界のシンボル。荒廃した砂漠や山地にしか生えない。
- ・ 只是失却少父便是 それは少父を失却したことにほかならない。少父は法華経涌出品に「父少而子老、举世所不信」。

問う、玉殿に苔の生ゆる時如何ん。答えて曰く、正位に居らず。進んで曰く、八方より来朝する時如何ん。云く、礼を受けず。云

く、与摩ならば則ち何ぞ来朝するを用いんや。違つときは則ち暫く違つも、順つことは是れ臣の分の事なり。云く、君の意如何ん。云く、枢密も意を得ず。云く、与摩ならば則ち治国の功は全て臣相に歸し去らん。云く、還た君の性を知るや。对えて云く、外方は敢えて論ぜず。

・不居正位 天子が正位に居れば玉殿が荒廢することはない。

・違則暫違云々 来朝しないのはしないのにまかすが、臣としての礼を尽くすのは臣の分だ。

・枢密不得旨 そば付きの臣にも天子からの何の沙汰もない。

・還知君性不 臣相は君というものを意識しているのだろうか。

・外方不敢論 君以外のものは言あげしない。

師、僧に問つ、名は何摩ぞ。对えて云く、智輪なり。師云く、智輪と法輪とは相い去ること多少ぞ。輪無对。邈公代つて云く、亦た同じく亦た同じからず。紹公代つて云く、織毫も隔てず。強上座代わつて云く、近からんと要せば則ち近く、遠からんと要せば則ち遠し。師云く、作摩生か是れ近からんと要せば則ち近し。对えて云く、同轍に載す。師云く、作摩生か是れ遠からんと要せば則ち遠し。云く、衆輻に同じからざるもの則ち是れ。師云く、阿那个か是れ先なる。云く、衆輻に同じからざる者先なり。師云く、是くの如し、是くの如し。

・相去多少 どれだけ離れているか。ちがいはどうか。

・織毫不隔 間隔がない。

・同轍載 智輪も法輪も同じ轍の車にのっている。

・不同衆輻 そんじよそこの車ではない。

・阿那个是先 どちらの車が先に進むか。

問う、如何なるか是れ法身の主。師良久す。

問う、承るらく、先師に言つこと有り、学処玄ならざるは流俗の阿師と。如何なるか是れ玄。師云く、未だ問わざる前。僧云く、与摩ならば便ち是れ玄なること莫きや。師云く、玄ならば則ち是れ流俗の阿師ならず。僧云く、如何なるか是れ玄。師云く、口を換えて問い来たれ。

・ 未問前 お前のその問の前だ。

・ 与摩莫便是玄也無 ということであれば未問前が玄なんですな。

・ 換口問来 別な口で問え。

問う、三乘十二分教に還た祖師の意有りや。師曰く、有り。僧曰く、既に祖師の意有るに、又た西来するを用いて什摩をか作す。師云く、只だ三乘十二分教に祖師の意有り、所以に西来せり。

・ 西来意は元来、意図、目的だが、ここでは意味の意。

・ 又用西来作什摩 西来したってなんの役に立つか。

問う、如何なるか是れ和尚の家風。師云く、与摩の酔漢に問うて什摩をか作す。又た云く、閻梨の問いに困らざれば、曹山も也た知らざりしならん。

・ 問与摩酔漢作什摩 こんなよっぱらいにものをたづねて何になるんだ。与摩は元来副詞だが形容詞にも使つよつになる。

・ 困閻梨門曹山也不知 お前に問われなきや気がつかなかつた。

問う、如何なるか是れ異類。師云く、異中には類を答えず。又た云く、我れ若し侘に向かつて道わんに、驢年に異を得んや。又た云く、曹山に只だ一雙の眉有り。

・異中不答類 異という世界では類は無用になる。

・我若向侘道云々 まさか俺の答えてお前が異類に生まれ変わるとでも思ってるのか。驢年は異類の縁語 見込みのない生涯をいう。

・曹山只有一雙眉 わしにはちゃんとした顔がある。

問う、文殊は什摩と為てか劔を瞿雲に仗たすつる。師云く、閻梨が今時の為なり。進んで曰く、如来は什摩と為してか却つて善く害すと称せる。師云く、大悲もて群生を覆護すればなり。云く、未審いみじし、殺し尽くせし後如何ん。師云く、方はめて不死者を識る。僧云く、只だ不死者の如きは、瞿雲の為に是れ什摩の眷属なりや。師云く、閻梨の与に安名することは即ち得たるも、只だ恐るらくは眷属と成らざらん。僧云く、時中如何んが給侍せん。師云く、子当に善く害すべし。

・文殊仗劔 大宝積経一〇五(大一一五九)による。

・方識不死者 殺し尽くしてはじめて不死者が知れる。

・与閻梨安名云々 お前に安名することはよろしいが、お前が期待しているような眷属には恐らくなれまい。

問う、華嚴経に云く、大海は死屍を宿さずと。如何なるか是れ大海。云く、万有を包含す。如何なるか是れ死屍。師云く、絶氣の者は著おかず。僧云く、既に万有を包含するに、絶氣の者は什摩と為てか著かざる。師云く、大海は其の功に非ず、絶氣の者には其の徳有り。僧云く、未審し、大海に還た向上の事有りや。師云く、有りと道い無しと道うことは即ち得たるも、竜王の劔を按ずるを争

奈何んせん。

- ・ 絶気者不著 息を引き取つた者は置かない。
- ・ 道有道無即得 有と言いたけりや有と言ひ、無と言いたけりや無と言ってよかるう。
- ・ 争奈竜王按劔何 へたなことを言つと竜王に切り殺されるぞ。

師、僧に問う、手裏は是れ什摩物ぞ。对えて云く、仏頭上の宝鏡なり。師云く、既に是れ仏頭上の宝鏡なるに、争でか闇梨の手裏に到ることを得たる。僧無对。師代わつて云く、諸仏は却つて是れム甲の児孫なり。

問う、古人道う、仏は道を会せず、我れ自ら修行せん、と。如何なるか是れ仏は道を会せず。師云く、仏界裏には会すること無し。石門云く、更に会して什摩をか作す。如何なるか是れ我れ自ら修行せん。師云く、向上無事。僧云く、只だ這个のみなりや、別に更に有りや。師云く、只だ這个のみ、阿誰か奈何んせん。

・ 古人 南泉普願語

・ 更会作什摩 それ以上会して何になるんだ、仏は既に会しているのだから。

・ 只這个云々 それだけですか、それ以上何かあるのですか。這个は向上無事を指す。

問う、大保任底の人、一念を失するとき如何ん。師云く、始めて保任することを得たり。僧曰く、大魔王と作る時如何ん。師云く、仏有るを見ず。云く、最後の事如何ん。師云く、仏も亦た作らず。

・ 保任 自分の顔に百パーセント責任を持ち得ている人。それに堪える、それとびたり相即している。

問う、大利益を作す底の人は還た相似することを得るや。師云く、相似することを得ず。僧云く、什摩と為てか相似することを得ざる。師云く、道つを見ずや、大利益を作す、と。僧云く、此の人は還た尊貴有るを知るや。師云く、尊貴有るを知らず。僧云く、什摩と為てか尊貴有るを知らざる。師云く、是れ伊かれの未だ曹山を識らざればなり。僧云く、如何なるか是れ曹山。師云く、大利益を作す。

・ 還得相似不　そこそこまで行きますか。

・ 伊　此人。

問う、承るらく、甘泉に言うこと有り、耕人の牛を牽き、飢人の食を奪う、と。如何なるか是れ耕人の牛を牽く。師云く、露地を与えず。如何なるか是れ飢人の食を奪う。師云く、醍醐を去却す。

・ 露地　牛の居るにふさわしい地。

・ 去却　とりはらう。

問う、承るらく、古人に言うこと有り、看る時は浅浅、用いる時は深、と。浅は則ち問わず、如何なるか是れ深。師便ち叉手して閉目す。学人問わんと擬ほつす。師云く、釣去ること遠し、何ぞ必ずしも船に尅せん。

問う、如何なるか是れ玄。師云く、何ぞ早く問わざる。云く、如何なるか是れ玄中の又た玄。師云く、故もとより一人の在る有り。

・ 何不早問　今頃そんなことを問うのか。

・ 一人　曹山。

問う、承るらく、師拏す、新豊に言つこと有り、一色処に分不分の理有り、と。如何なるか是れ分。師云く、一色に同じからず。僧曰く、与摩ならば則ち今日よりし去らざるなり。師云く、是なり。如何なるか是れ不分。師云く、弁ずる処無し。僧曰く、只だ弁ずる処無きが如き、這裏は豈に是れ父子通じて一身と為るならずや。師云く、是れ汝還た会するや。僧云く、正当一色時には向上無し。師曰く、向上には本来一色無し。云く、只だ一色の如きは還た是れ宗門中の意旨なりや。師云く、是ならず。僧云く、既に是ならざれば、什摩人の為に説けるや。云く、我れ只だ宗門中に人の承当するもの無きが為に、所以に這个の人の為に説けり。僧云く、与摩ならば則ち頓有り弱有り去るなり。師云く、我れ若し頓と説き弱と説かば則ち那边に落ち去るなり。僧云く、宗門中の事、如何んが承当せん。師云く、須らく是れ其中の人なるべし。如何なるか是れ其中の人。師云く、我れ此の山に住し来たれるより、未だ曾つて其中の人に遇見せず。僧云く、今時に其中の人無し。和尚、古人に遇つ時、如何んが承当せん。師云く、展手せず。僧云く、古人の意旨如何ん。師云く、闍梨但だ展手すること莫れ。僧云く、与摩の時、和尚は還た分付すや。師云く、古人は汝を罵らん。

・理 すじめ。

・不同於一色 分という観点からすれば、それは一色ではなくなる。

・与摩則不従今日去也 といふことは、今の如何なるか是れ分と問つた時点からそうだとしたことではないといふことですか。今日にはじまつたことではないといふことですか。時間の觀念が入つて来る。

・弁処 弁別のしよつ。

・正当一色時無向上 私は次のような解り方をします。一色処というアブソリュートなものを設定するとき、もう向上というものの可能性がなくなる。向上はそのまぎ。

・向上本来無一色 いかにもそつだ。ここで質問者はガクンと来たてであらう。

・只如一色云々 一色といふのは宗門中の意旨ではありませんか。そう簡単に無しとは言えないのではないか。

・即不是什摩人説 じゃ、誰を対象にして洞山はそついうことを説いたのですか。

- ・ 承当 accept. ひきとる、背に負つ、懐に抱き込む、腋にかかえ込む。
- ・ 不展手 私は古人に対して展手しない。展手は、承当しようとする姿勢。
- ・ 還分付也無 何か一言言われますか。今言われたことを古人に言われますか。分付は人にもものを言いつける場合にも用いる。ものを頼む、付嘱する。

問う、如何なるか是れ無刃の劍。師云く、熟練の成す所には非ず。僧云く、用いる者は如何ん。師云く、来たる者は皆な尽くす。僧云く、来たらざる者は如何ん。師云く、亦た須らく尽くすべし。僧云く、来たらざる者、什摩と為てか却つて須らく尽くすべき。師云く、道つを見ずや、能く一切を尽くす、と。僧云く、尽くす後如何ん。師云く、方めて此の劍の有ることを知る。

- ・ 亦須尽也 それも全滅すること受けあいだ。須は、必ず、絶対に、間違いなくそうなる、という意。

僧問う、如何なるか是れ沙門の相。云く、眼を尽くして看るも見えず。還た被搭するや。云く、若し被搭すれば則ち是れ沙門の相ならず。如何なるか是れ沙門行李の処。云く、頭上に角を載せ、身に毛衣を著く。此の人は什摩人の力を得て則ち此くの如きを得たるや。云く、終日、他の力を得て只だ是れ行きて住まらず。此の人は何を持って賣しと為すや。云く、頭上に角を載せず、身上に毛を被らず。

- ・ 尽眼看不見 どんなに目をこらしても見えない。
- ・ 得……力 ……のおかげをこうむる。
- ・ 還被搭也無 衣を着ていますか。搭は、背にものを背負ったり、脚絆をまいたりすること。
- ・ 只是行不住 ひたすら行つてとどまらない。只是は、ただ、only.
- ・ 此人以何為賣 一体なにが目あてですか。

師、天復元年辛酉の歳の夏中より、忽ち一言有り、雲岳師翁は年六十二、洞山先師も亦た六十二、曹山も今年亦た是れ六十二なり。趁讀して一解子と作るに好し、と。閏六月十五日夜、主事に問うて曰く、今日は是れ何の日月ぞ。對えて云く、閏六月十五日なり。師云く、曹山は一生行脚し、到处に只管に九十日を一夏と為す。来日の辰時に至りて、師は化に当たれり。春秋六十二、僧夏三十七なり。元證大師と勅謚す。

・趁讀 人の後についてまわつて、ふざけちらすこと。

・解子 護送役の刑事。

華嚴和尚、洞山に嗣ぐ、洛京に在り。師諱は休靜。大いに京都を化し、禅林に独り秀で、花嚴寺に住す。

時に人有りて問う、日の未だ出でざる時如何ん。師云く、国乱れて明主を思い、道泰ければ則ち尋常。

師、京中に在りて内齋に赴く。他の諸名公は悉く皆な経を転ずるに、唯だ師と弟子とのみ有つて経を転ぜず。帝、師に問う、師は也た且く経を転ぜざるに従まがず。弟子は什摩と為てか経を転ぜざる。師云く、道泰くして天子の令を伝えず、時人は尽く唱う泰平の歌。

問う、王子の未だ九五に登らざる時如何ん。師云く、六宅の戯に遊ぶを貪り、国内の虧くるを覚えず。王子の正に九五に登る時如何ん。師云く、朱廉齊しく巻き上げ、四相朝儀を整つ。九五に登りし後如何ん。云く、金箱に玉璽を排ね、御轡は四方より歸る。

問う、大悟底の人、什摩と為てか却つて迷う。師云く、破鏡は重ねて照うさず、落花は枝に上ること難し。

・破鏡云々 割れた鏡はふたたびものを映さない、散じた花はもはや枝にもどらない。光をつつみ輝きを秘することの喩え。

問う、師は幸いに是れ後生なるに、什摩と為てか却つて善知識と作りし。師云く、三歳宅家の竜鳳子、百年塔下の老朝臣。

・幸は後生 いい若者でいらつしやるのに。

・百年 死ぬまで。

問う、祖意と教意とは同か別か。師云く、竜宮城に入らざれば、衆義豈に能く詮せんや。

・衆義 仏法のあらゆる義。

師、初めて洞山に見えし時問う、見ることは則ち見るも、情識の雲偽を争奈何んせん。洞山云く、汝還た見るや。対えて云く、見る。洞山云く、既に見るに、什摩と為てか情識の雲偽ある。対えて云く、情識の雲偽を争奈何んせん。洞山云く、若し与摩ならば則ち万里無寸草の処に立て。

・情識 智度論三十一(大二五 二九二a)に、「因眼縁色生眼識。若離所縁、識不可得。余情識亦如是」と言つ。

溪林和尚、木剣を把つて云く、魔の来たりて我を撓す、魔の来たりて我を撓す、と。人有りて問う、和尚は尋常、什摩と為てか却つて魔に撓さるる。云く、賊は貪児の家を打せず。人有りて師に拳似せり。師云く、我れは与摩には道わず。僧問う、和尚如何ん。云く、魔の来たりて我を撓す無し。云く、和尚は什摩と為てか魔の来たりて撓すこと無き。云く、賊は貪児の家を打せず。禾山拈じて僧に問う、作摩生か道わば、两个の和尚の意を通じ得ん。亦た須らく自ら主と作るべし。無対。自ら代わつて云く、有に因らず亦た無に非ず。

後ち河北に遊び、錫を平陽に返す。遷化の後ち茶毘し、舍利もて四処に塔を起せり。宝智大師無為の塔と勅謚す。

本仁和尙、洞山に嗣ぐ、高安県に在り。師初め浙西に住し、已に法席を張るも、後に衆を避けて到处に遊方す。玄談を匿すと雖も、而も参徒行住に奔湊す。天復の間、因みに高安県の白水禪院に住せり。数年にして徒衆或いは三百三百に至れり。

鏡清行脚せし時に到る。師問う、時寒し、道者。对えて曰く、不取。師云く、還た臥單の蓋し得る有りや。对えて云く、設い有るも亦た展ふる底の功夫無し。師云く、直饒たてい道者滴水滴凍するも亦た他かれが事に干せず。对えて曰く、滴水氷生するも事は相い渉らず。師云く、是なり。云く、此の人は意作摩生。云く、此の人は意に落ちず。云く、意に落ちざる此の人、響。師云く、高山頂上には道者に与えて啗喙せしむ可き無し。

・滴水滴凍 水のしたたりがぼとぼと。

・響 詰問の語の余声。何かを指し示すことによつて反問したり、それへの注意を促したりする間投詞。

洪州西山の諸行者来たりて問う、今日は別事の為にせず、乞う師指示せよ。師曰く、汝諸人は指示せんことを求むるや。对えて曰く、是なり。師云く、我をして阿誰に分付して得しめん。

師は遷化に臨みし時、先ず遍処に人に辞せり。人は皆な泣戀し、謂いて言く、他去かれる、と。来辰、齋を修めしむ。食し畢つて鐘を声ならし、衆を集めて香を焚かしめ、緇素をして擁遶せしむ。師は跏趺して坐す。香煙尽きて、師は端然として遷化せり。

青林和尚、洞山に嗣ぐ、江西に在り。師諱は師度。初め青林に住し、後ち洞山に住す。平生住持高節にして、宇内に声揚がれり。師は先師の法席に在りし時、松樹を栽えし後、一首の頌を道えり、短短として一尺余、織織として緑草を覆う。知らず何の世の人の、此の松の老ゆるを見るを得るを。先師、此の偈を見し後云く、此の人、三十年後、来たりて此の山に住し、香飯もて師僧を供養せん。果然として是れ三十年後、洞山に住し、毎日細飯もて師僧を供養せり。

・ 見此偈後 此の偈を見た時。

・ 細 上等の。

問う、森蘿を巻き尽くして師に逢わざる時如何ん。師云く、孤峯独り秀す。僧云く、彼彼の事如何ん。師云く、兩人、大瀉を掴す。

師拳す、先師上堂して衆に示すらく、今時の人の相似することを得ざるは、只だ心を將て学ばんと擬するが為なり。若し他に似去らんと欲得すれば、死人の一息も来たらざるなり。阿那个の人が直に這個に似ん。当時、軋訶上座出で来たりて問う、正当一色の時、還た向上の事有りや。先師云く、無し。其の僧珍重し、便ち僧堂に歸りて白擲して云く、五百来人の這裏に在るは、是れ向上の事の為にせざることを莫きや。堂頭和尚は無しと道う、成持す可からず。合殺処に折合し了らば休し去らん。若し是れ某甲ならば、這裏に在りて虚しく一生を過ごすを得ず、と。此れに因りて大衆は捻へて装裹せり。

主事、和尚に向かつて説う、僧衆は和尚の仏法を肯わず、惣べて発し去れり。和尚云く、伊に従せよ、我が事方めて行わるるを得ん。先師、主事をして僧堂の門を鑱却せしめたり。処分せし後、茶を閣裏に焼き、某に向かつて説えり、この一隊子去れり。然れども転じ来たらん。果然して転じて惣べて啼哭せり。先師、僧堂の門を開かず。大衆、主事に向かつて説えり、某等實に是れ凡夫にして、謬つて和尚の意旨を会し、錯つて肯わざりき。一切は和尚に在り。某等は和尚の面前に就いて収過せんと欲得ず、と。主事便ち房丈に去けり。和尚は門を閉却し、面壁して臥し、房丈の門を開かず。主事逼りて和尚に請い、方始めて門を開くことを得たり。主

事具さに前事を陳べ、和尚は僧堂に入ること許せり。

後ち大衆は一斉に高声に啼哭し、上來して師に上堂せんことを請えり。先師昇座せり。僧軌誓出で来たつて礼拝し、起つて云く、乞う和尚杖責(原作嘖)せよ。某甲等、広大劫來仏身血を出だし、和合僧を破し、直に今日に至り、謬つて和尚の尊旨を会せり。若し這个の身心を改めざれば、再び復するを得ること難からん。今日に於いて、伏して和尚の慈悲を乞ふ。先師又た悲声にして云く、少より來、^{このかた}曾つて手を把つて別人を指柱せず、豈に況んや造次に杖責せんや。夫れ一色に分不分の理有り、所以に闍梨の某甲に、正當一色の時、還た向上の事有りやと問いしに、某甲は無しと道えり。什摩の罪過か有る。

・五百來人 五百人ばかり。

・莫是不為向上事 向上の事のためにこそ集まっているのではないか。

・不可成持 理として成立しない。

・合殺処折合了休去 和尚の意見と自分とを折合したら、自分の立場を引つ込めねばならん。

・若是某甲云々 だから俺はこんな所でむだめしは喰わん。

・主事 青林和尚自身。

・従伊我事方得行 したいようにさしといた方が、わしの正しかったことが解るだろう。

・処分後 言いつけたあとで。

・収過 わびる。

・造次 おいそれと。

問う、省語は会し易し、乞う師、一言せよ。師云く、釈迦は室を掩じ、淨名は口を杜す。

師、遷化の時、遺囑して焚きて風に颺げしむ。師、墳塔を安立するを許さず。端然として化せり。

疎山和尚、洞山に嗣ぐ、撫州に在り。師諱は匡仁、未だ行録を覩ざれば、終始を叙べず。

師、行脚せし時、大安和尚の処に到れり。便ち問う、夫れ法身なる者は理として玄微を絶し、是非の境に墮せず。此は是れ法身の極則なり。如何なるか是れ法身上の事。安云く、只だ這个是れ。師云く、和尚与摩に道う、還た法身を出で得るや。安云く、是ならず又た是なり。

・ 向上 そのさき。

・ 出得 超出する。

・ 不是也是 そうではなくまたそうでもある。

又た香巖に到りて問う、自己に従わず、他の聖を重んぜざる時如何ん。答つ、万機休擺し、千聖も携えず。師、肯わず、便ち下り来たりて吐き出して云く、肚裏に不浄潔の物を喫せり。

人有り和尚の処に報ず。和尚便ち喚び来たらしむ。師便ち上来す。香巖云く、問を進め著せよ。師便ち問う、万機休擺することは則ち置く、千聖も携えざるは是れ何の言なりや。香巖云く、是なり、你作摩生か道う。師云く、重んずることを肯えば全きを得ず。香巖云く、你に道理無きならず。此くの如しと雖然も、向後若是山に住すれば則ち柴の焼くを得る無からん。若是江辺に住すれば、則ち水の喫するを得る無からん。説法に臨まんと欲する時は、須らく口裏より不浄物を吐き出すことを得べし。後ち疎山に住す。香巖の識の如し。

・ 不従自己云々 石頭の「不慕諸聖、不重己靈」といつ語による。

・不携 手をつながない。

・何言 どういう意味だ。

・是也佯作摩生道 ふんそうか、なるほど。お前さんはどう言う。

・肯重 千聖を重んずることを肯えば一案。

・須得口裏吐出不浄 いかなる説き方をしても、不浄を説くことになる。

夾山到る。問う、闌闕点ぜず、請う師、傍せざれ。夾山云く、不似の句、目前無法。師云く、不似の句は則ち且らく置く。目前無法は是れ何の言ぞ。夾山云く、更に三尺を添うれば、天下の人は奈何ともする勿なからん。師云く、只今還た奈何んせんや。

・闌闕不点云々 しぎりのしるしはどこにも有りません。うっかりまたがないで下さい。うっかり近よると足を取られますよ。

・不似之句 それそのものになり切っていない。

・只今還奈何也無 三尺足らぬ私の問をどうしてくれますか。破れかぶれ。

問う、如何なるか是れ直指。師曰く、珠中に水有るを君は信ぜず、天辺に向かつて太陽に問わんと擬す。

師、偈に曰く、我れに一宝琴有り、曠野中に寄在す。是れ弾く解あたわざるならず、未だ知音の者有らざるなり。

問う、和尚百年の後、什摩人か和尚の位を統紹する。云く、四脚は天を指し、背底は茫叢。人有りて第三百丈に問う、作摩生か是れ背底は茫叢。百丈云く、無貴の位を統がず。

鏡清到る。師挙して問う、重んずることを肯えば全きを得ずの話、道者は作摩生か会する。鏡清云く、全きことは重んずるを肯つことに歸す。師云く、全きことを得ざる者は作摩生。清云く、个中に肯つ路無し。師云く、始めて病僧の意に称えり。

鼓山到り、便ち問う、久しく疎山を嚮つに、元來是れ若子かくのこきに大なり。師云く、肉重きこと千斤にして、智は銖両も無し。鼓山云く、与摩ならば則ち学人は礼拝せずし去らん。師云く、誰か徐の肉山の地に倒るることを要めん。

・疎山 瘦せた山、とひっかける。

・若子大 でかつとした山ですね。若子は、このように。

・智無銖両 銖も両も目方の單位。

因みに鼓山、威音王仏を説著する次いで、師、鼓山に問う、作摩生か是れ威音王仏の師。鼓山云く、慙愧無きこと莫くんば好し。師云く、是れ閻梨の与摩に道つことは則ち得たり。若し病僧に約せば則ち然らず。鼓山問う、作摩生か是れ威音王仏の師。師云く、無貴の位に坐せず。

・莫無慙愧好 そういつ問いをすることで、威音の師の半徳をけがすことにならなければ好いが。

問う、去る時は尽く転じ去る。何ぞ三に却來するを用いん。師云く、大唐に木有ること難く、第三柱に却來す。

問う、遠見すれば則ち円、近見すれば則ち方、此れ喚んで什摩の字とか作なす。師云く、東海に鯨魚有り、頭を斬り亦た脚を断ち、背上に一骨を抽す、便ち是れ這个の字なり。

問う、仏在世の時衆生を度す。仏滅後、什摩人が衆生を度する。踈山答えて曰く、踈山。僧進んで曰く、還た度し尽くせざる者有りや。師曰く、尽く度せざる者有ること無し。

師因みに騎馬して行く次いで、措大問う、既に是れ騎馬なるに、什摩と為てか鐙を踏まざる。師云く、比來騎馬して足むあゆことを歌む。鐙を踏まば何ぞ歩行するに異ならん。

師、遷化に臨みし時、偈して曰く、我が路は碧空の外、白雲処る無くして閑か。世に無根の樹有り、黄葉風を送りて還す。

竜牙和尚、洞山に嗣ぐ、潭州の妙済に在り。師諱は居遁、俗姓は郭。撫州南城の人なり。年十四にして吉州の蒲田寺に於いて出家せり。依年、嵩岳に具戒す。初め翠微、香巖、徳山、白馬に参す。請益して已に勞すと雖も而も機縁未だ契わす。後ち洞山の言は格外に玄にして、語は時機に峻たるを聞き、遂に乃ち策筈して其の席に造れり。

師、問うて曰く、人有つて鑊錐の刃を持ち、師の頭を取らんと擬する時如何ん。洞山云く、取ることは即ち且らく闍梨に従まがす、且らく什摩をか喚んで老僧の頭と作す。師は此の問いを持って在処に其の機に契わざりしも、忽ち洞上の斯の言を聞きて當時に失対せり。遂に摠衣の意有り、他遊を慕わす。既に禅征を罷めたれば、寧んぞ請益有らんや。

・ 師持此問 この問を持ちまわつたが。

・ 在処 どこでも。

洞山問う、闍梨、名は什摩ぞ。対えて云く、玄機なり。作摩生か是れ玄底の機。又た無対。洞山、三日を放ゆるせり。無対。師、此れに因りて偈を造れり、学道して師の指して却つて閑かなるを蒙り、中に路の人間に隠るる無し。時人は尽く千の経論を講ずるも、一

句時に臨んで口を下すこと難し。洞山、末後の語を改めて云く、一句伊をして口を下すこと難からしむ、と。此れよりして名を改めたり。

・指却閑 さり気なく指ざしている。

・教伊 俺はかれをして。

師、洞山に問う、如何なるか是れ祖師の意。洞山云く、洞水の逆流するを待ちて則ち汝の与に説かん。師、言下に於いて頓に玄旨を承けたり。衆に隠れて棲息するもの七八年間、日び精妙を斫れり。楚王殿下請うて妙濟禅林に赴かしむ。玄徒五百余人あり。爰に章服と師号證空大師とを奏せり。

師、衆に示して曰く、夫れ参学の者は須らく祖仏を透過して始めて得べし。所以に新豊和尚道う、仏教祖教は生怨家の如くして始めて学ぶ分有り、と。汝若し祖仏を透原作秀過し得ざれば則ち祖仏に謾らるることを被らん。

人有りて問う、祖仏に還た人を謾るの心有りや。云く、汝道え、江湖に還た人を礙つるの心有りや。師又た云く、江湖に人を碍つるの心無しと雖も、時人透過し得ざるが為に、所以に人を碍つることを成し去る。江湖は人を碍えずと道うを得ず。祖仏に人を謾るの心無しと雖も、時人の祖仏を透過し得ざるが為に、所以に人を謾ることを成し去る。祖仏は人を謾らずと道うを得ず。若し与摩に祖仏を透過し得れば、此の人却つて祖仏の意を躰得せん。方はめて向上人と同じからん。未だ透り得ずして、但もし仏祖を学ばば則ち万劫にも得る期有ること無からん。

・生怨家 親のかたき。

問う、達摩未だ来たらざる時如何ん。師答えて曰く、可怜生。進んで曰く、任摩にし去る時如何ん。師曰く、二祖は什摩を得しや。

・ 可怜生 氣の毒な、あわれな、氣の毒に。達摩未來時の中国の業識のうごごむぞつ。

雲居、洞山に問う、如何なるか是れ祖師の意旨。洞山答えて曰く、忽ち人有って閻梨に問わば、閻梨は作摩生か道わん。雲居曰く、某甲罪過。

僧有り此の語を持って師に問う、洞山は還た道い得たるや。師曰く、洞山は未だ道わす。雲居も也た未だ得ず。進んで曰く、既に是れ未だ得ざるに、什摩に因りて喚んで雲居と作すや。云く、洞山の意を躰得すればなり。云く、洞山は什摩と道いしぞ。師云く、雲居聞く底。又た師云く、此は是れ肉身成仏の語なり。

問う、一心生ぜざる時如何ん。師答えて曰く、什摩の時か心を生ぜざる。進んで曰く、与摩の時は鳥道は何の分なりや。師行く、正に伊摩の時に鳥道を行く。曰く、如何んが弁せん。師曰く、却つて須らく鳥道を行くべし。

・ 如何弁 鳥道をどう見つけますか。

問う、如何なるか是れ道中の用。師答えて曰く、無心是れ道中の用なり。進んで曰く、無心に還た用有りや。師云く、無心ならば用は即ち天下に遍ねし。

師、徳山に問う、遠く徳山の一句の仏法を聞くに、到来するに至るに及んでは、未だ曾つて和尚の一句の仏法を説くを見ず。徳山云く、什摩をか嫌う。師肯わず、当時に便ち発し去り、後ち洞山に到り、只だ前話を問えり。洞山云く、争でか専甲を恠得せん。師当時に住まれり。

・ 嫌什摩 何が不満なのだ。

問う、如何なるか是れ祖師西来意。師云く、石の烏龜の解く語るを待ちて即ち汝に向かつて道わん。僧曰く、石の烏龜は解く語るなり。師曰く、道者に向かつて什摩と道いしぞ。

又た頌すらく、万般の施設如常ならず、又た人を驚かさず又た久しく長し。如常なるは恰も似たり秋風の至るに、意の人を涼しからしむる無くして人自ら涼し。

問う、師、古人に見えて、个の什摩を得しや。師云く、賊の空室に入るが如し。

又た頌して曰く、道に進むときは先ず須らく自身を立つべし、直に行く処をして塵を生ぜざらしめよ。真僧は嚴室を俱つるを仮らず、到处に無心なるは即ち人に在り。玄室に参尋するときは修に因ること莫れ、学処は須らく自らの分に自らしめよ。千聖は從來異路無し、忘縁の機智に多聞有り。未了の時は親しく遍く礼し、応に端坐して清貧を守るべからず。直に羅睺の密行を行ずるに似て、豈に迦葉の不聞の聞の如くせんや。人若し無心ならば道情に称わん、無明を識得して道已に明らかなり。人能く道を弘めて道は能く現れ、道は人中に在りて人自ら寧し。

師出世して近^ほば四十年、凡そ歌行偈頌並びに広く世に行わるるも、此に尽くは彰わさず。竜徳三年癸未の年九月十二日帰寂せり。

幽棲和尚、洞山に嗣ぐ、台州に在り。未だ実録を觀ざれば、化縁の終始を決せず。

鏡清、師に問う、如何なるか是れ少父。師云く、標的無し。進んで曰く、何を以てか少父と為す。云く、什の罪過有りや。進んで曰く、只だ少父の如きんば又た作摩生。云く、是れ什摩の心行ぞ、道者。

師、順世するに臨みし時、僧有りて問う、師は百年の後、什摩処に向かつてか去る。師云く、調然、調然。

上藍和尚、夾山に嗣ぐ、洪州に在り。師諱は令超。初めて上藍山に住するや、鐘陵大王、預章に統覇して師を迎えて府に出でしめ、護国院を構えて、礼重して師と為せり。凡そ百億の所須、始終替らず。紫衣と師号妙覺大師とを奏す。

問う、二竜珠を争つ、誰か是れ得る者ぞ。師云く、明珠は彼中に向いて翫あばず、竜と非竜と争でか珠を得ん。

大順元年正月十五日、鐘を声ならして衆を集めしめ、遺誨し訖つて端然として化せり。元真大師本空の塔と勅謚す。

祖堂集卷第八